研究課題　一八世紀オランダ東インド会社の遣清使節日記の翻訳と研究

研究経費　四五万二四二二円（前年度よりの繰越）

研究組織

　研究代表者　　　大野晃嗣（東北大学）

　所内共同研究者　松方冬子・大東敬典

　所外共同研究者　森田由紀・Leonard Blussé（ライデン大学）

研究の概要

（１）課題の概要

　オランダ東インド会社は、清朝との貿易を実現・改善するため、何回か使節団を派遣しているが、そのうち、一七九四～一七九五年の乾隆帝の在位六〇年を祝う使節団は、有名なイギリスのマカートニー使節団との対比上も有名である。正使は、日本商館長を務めたティチングであった。しかし、ティチング使節団の残した記録は、ティチング自身によるオランダ語の日記のほか、副使ファン・ブラーム・フックへ―ストによるフランス語の日記、さらに通訳として同行した学者ド・ギーニュによるフランス語の日記があり、最低限でもオランダ語とフランス語の読解力が必須である。さらには地名・人名・官名を含む当時の中国についての広範な知識をも必要とするため、今まで日本語に訳されたことはなかった。今回、中国史研究者（大野、Blussé）、オランダ語史料の翻訳実績を持つ史料編纂所海外2室の教員が、在野の翻訳者に協力する形で、この課題に挑む。

（２）研究の成果

　本研究は、多様なバックグラウンドをもつ研究者、ノン・アカデミックの翻訳者が一堂に会することによって新しい知見を得ることを目的とし、その目的は着実に達成されつつある。  
細かいところでは、ティチングの日記によるSjapという言葉の訳出である。Sjapはマレー語で「印（いん、しるし）」のような意味であり、一般にアジアで活動するオランダ語史料のなかで多用される。ティチングによる日記においても、「印のある書翰」「印のある証書」の意味で使われているだけでなく、「龍牌」（皇帝の名前を記した位牌状の板）の意味でも使われている。清朝の総督・巡撫が任地にあって、いわば「皇帝の代わり」として儀礼に「龍牌」を使用することは、大清會典に見えるが、その具体的な使われ方は漢文史料ではなかなかわからないため、本日記の記述は貴重である。ティチングと皇帝の謁見の場も、けっして儀式的な雰囲気ではなく、屋外のカジュアルな場面であり、参加した明清史研究者（大野）から意外だとの感想が聞かれた。清朝史研究にオランダ語史料を用いることのメリットが明らかになった。  
大きなところでは、既存の異文化論の枠組みをあらためて検証する必要性が指摘された。ティチングの日記は最近Tonio AndradeがThe Last Embassyという書物で取り上げ、（ティチングの遣使は具体的な成果もなく失敗だったという従来の評価に対し）交流自体を目的とする「社交外交」なので成功だったと論じている。本研究では果たして「成功」「失敗」という評価のあり方が妥当なのかが、議論になった。参加した西南アジア史研究者（大東）が、インド史研究者Sanjay Subrahmanyamの学説を援用し、（従来の「分かり合えないincommensurability」という暗黙の前提に対する）「大体分かり合えるcommensurability」概念が有効なのではないかと提案した。  
オランダ東インド会社の遣清使節日記の「翻訳」が単なる翻訳ではなく、学際的な議論の場となり、細かな事実関係から世界史の描き方に至る多様な論点を浮かび上がらせる場となっている。